

特 34

799

小學日本文典

田中義廉著

三

昭和十一年十一月廿七日東京交社

物類

小學日本文典卷之三

第二編下

第十三章

動詞

田中義廉 著

動詞を事物の作動、作業等、百般の状態を示はすの
 のに、實り文章中、主格の名詞と共に最、首要
 の詞あり。故り一の動詞を缺くとせば、全文章
 をふさぐを以て、意義を通曉するに能はば、
 假令ど 鳥が能く飛ぶ と、
 の名詞にして、飛ぶを動詞あり。此の如く文主と

類文典
 屬日本
 冊十二
 函十九
 執

動詞と、連結する。とまも、全き文章をあら故り、其
意義も能く通曉也。然るを令 鳥が能く くの
そりよとまも、全き文章をあらを以て、其意
義も通曉する。ことあり。此故り説話、文章を論ぜ
る一の動詞を缺くとまも、全體をあらるもの
と知るべし。

動詞を種類、活用法及び時限あり、又動詞の中
より、分詞、助動詞の別あり、今これらを逐次示す。
此次蒙を審り悟らざるを、全き文體を理解する
こと能くばるものあり。

第二十四章 動詞の種類

動詞の種類も、他動詞、自動詞あり、一より二を動
詞の性より。又作動の能く他より移ると、他より
移る来るより従て、能動、受動の別あり。

他動詞を、文主の作動能く他の物品より及達する。
をり、故に物品を缺くとまも、意義の解し難き
詞あり。假令を 人が書り讀み 或は 風が木

を倒す やりよとま、讀み或は倒すある詞も他
動詞にして、人或は風ある文主の作動、能く書或
は木ある物品より移るを指示せり。故り只 人

が讀ム 風が倒ス。ヤウのトキモ全た文章をふまざる故に何物を讀ム又何物を倒スを解することなし依て此類の詞を他動詞といふなり。

自動詞も文主獨、自ら作動するものにして他の物ヲ移るることなし故に物品を缺くとも其意義の能く通曉する詞を以て。假令も 人が眠ル山が聳エ 山が聳エるとき眠ル又聳エある詞を自動詞なりを以て人又山ある文主の作動を他に移ることをあてて其意義を解するを得

なり。故に此類の詞を自動詞といふ。其外、自他兩様ヲ作動する動詞あり、これを普通性といふ。假令も 彼ハ新聞ヲ語ル トリよトキ語ルを他動詞とありて彼ある文主の作動能く新聞ヲ移るものありども、これを又 彼ハ獨語ル トリよトキを自動詞とありを以て、文主の作動を他の物ヲ移ることを以て、風ある文主の作動を他の物ヲ移ることなし。然るども、これを又 風が人ヲ吹

| | | | | | | | | | |
|------|------|------|-----|------|------|------|-------|-----|-----|
| 成 | 借貸 | 閑 | 延 | 集 | 定 | 沼 | 切 | 折 | 割 |
| ナス | カス | トツ | ノブ | フツム | サグム | オサム | キル | ラル | ワル |
| ナル | カル | トツル | ノブル | フツマル | サグマル | オサマル | キル | ラル | ワル |
| 感 | 迷 | 眠 | 起 | 出 | 滅 | 醒 | 劫 | 来 | 枯 |
| マドフ | マヨフ | ネムル | オク | イヅル | ホロフル | サムル | オビユル | キタル | カル |
| マドハス | マコハス | オムフス | オコス | イダス | ホコボス | サマス | オビヤカス | キケス | カラス |

他動詞自動詞共々、皆作動の次第ヲ從て、能動、受動の別有り。さて能動も、此物の作動、能く他の物に及達するを云ひ、受動も自ら他の物の作動を受くるを云ふあり。假令ぞ 教師ガ生徒ヲ教フ 風ガ木ヲ倒ス と云ふとき、教師及び風の作動を、生徒及び木ヲ及達するを以て、それを受動と云ふ。今又それより反して 生徒ガ教師ニ教ヘラル 木ガ風ニ倒ナル とき、生徒及び木も、教師及び風の作動を受くるを以て、それを受動と云ふあり。

他動詞の能動も、本然の形を變するごとく、ことなし。其受動も、ル 受動 此詞を有する ラル 約言 也 あり、助動詞と結合す。此詞の變畫を於ては必じ ル レ ラル レ あり、詞を變化す。又自動詞の能動も、ス テ あり、助動詞と結合す。此詞の變畫を於ては皆 シ あり、詞を變化す。而して其受動も、一旦他動の形となり、後亦 ル ラル あり、助動詞と結合す。此詞の變畫も、他動詞の ル の リ 同し。茲に ル ラル ス あり、詞を、動詞を結合して、恰も詞尾の如くあれども、其實も助動詞にして、他

の詞尾と全く異なり。及第第二十六章分詞の條の條しを見。さて他動詞、及び自動詞の能動、受動、及び變畫を、左表を揭示す。

| 能動の形 | | 受動の形 | | 變畫 | |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 他動詞 | 碎クダク | クダカル | クダカル | クダカル | クダカル |
| 他動詞 | 沼オサム | オサメラル | オサメラル | オサメラル | オサメラル |
| 自動詞 | 眠オムラス | オムラサル | オムラサル | オムラサル | オムラサル |
| 自動詞 | 驚オドロカス | オドロカサル | オドロカサル | オドロカサル | オドロカサル |

他動詞の受動、及び自動詞の能動受動も、本然

| 段 二 中 | | | 用 活 段 四 | | | | | |
|-------|-----|--|------------|----|----|----|----|--|
| 應 | 落 | 起 | 有 | 住 | 逢 | 打 | 押 | 飽 |
| ロヒ | オナ | オキ <small>バロ シロ ハン ノズ</small> | 第二轉 | アラ | スマ | アハ | ウナ | オナ アカ <small>バロ シロ ハン ノズ</small> |
| コロ | オナ | オキ <small>テロ クカ タリ</small> | 第二轉 | アリ | スマ | アロ | ウナ | オレ アキ <small>テロ クカ タリ</small> |
| コフ | オツ | オク <small>ベキ ク</small> | 第一行 第三轉 | アル | スマ | アフ | ウツ | オス アタ <small>ベキ ベク コト ロト 等</small> |
| コフル | オツル | オクル <small>ク</small> | 第二行 第三轉 | | | | | |
| コロ | オナ | オキ <small>ヨ</small> | 第一行 第四轉 | アレ | スマ | アヘ | ウテ | オセ アケ <small>ヨ バ ド モ</small> |
| コラレ | オソ | オク <small>ヨ バ ド モ</small> | 第二行 第四轉 | | | | | |

| 用 活 段 二 下 | | | | | | 用 活 段 | | |
|-----------|-----|-----|-----|-----|--|------------|-----|------|
| 消 | 流 | 譽 | 捨 | 瘦 | 受 | 用 | 老 | 恨 |
| キエ | ナカレ | ホメ | ステ | ヤセ | ウケ <small>バロ シロ ハン ノズ</small> | 第一轉 | オイ | ウラミ |
| キエ | ナカレ | ホメ | ステ | ヤセ | ウケ <small>テロ クカ タリ</small> | 第二轉 | オイ | ウラミ |
| キユ | ナカレ | ホム | スツ | ヤス | ウク <small>ベキ ク</small> | 第一行 第三轉 | オユ | ウラム |
| キユル | ナカレ | ホムル | スツル | ヤスル | ウクル <small>ク</small> | 第二行 第三轉 | オユル | ウラムル |
| キエ | ナカレ | ホメ | ステ | ヤセ | ウケ <small>ヨ</small> | 第一行 第四轉 | オイ | ウラミ |
| キユレ | ナカレ | ホムレ | スツレ | ヤスレ | ウクレ <small>ヨ バ ド モ</small> | 第二行 第四轉 | オユレ | ウラムレ |

ハ

表中第三轉ヲ於て、四段活用の動詞を、總て他の詞と結合するも、其形を變化する事あり。これ此活用を分詞とあるも、同形ある故あり。然るも、二段活用の動詞の分詞とありて、形容詞の用をあたるときは、現在の不定法と同形あり。必ず第三轉第二行の活用に從ひ、其詞尾「ル」の字を加ふるを法則とせん。又第四轉ヲ於て、四段活用の動詞を命令法、接續法とも同形あり。然れども、二段活用の動詞に於て、接續法をあたるときは、必ず第二行の

活用より、**ド** **ド** **モ** **ヲ** 續くものあり。令畧表を左に擧ぐ。

| | | | | | | | | | | | |
|-------------------------|----|------------|------|----------|----|------------|------|----------|----|------------|-------|
| 第三轉の活用 直り形容詞 あるもの | | 命令法 接續法 | | 中二段活用の動詞 | | 命令法 接續法 | | 下二段活用の動詞 | | 命令法 接續法 | |
| スハイヘ | 家住 | スメヨ | スメドモ | オルキ | 雪落 | オチヨ | オツドモ | ナカレヨ | 水流 | ナカレヨ | ナカレドモ |
| アフサカ | 坂途 | アヘヨ | アヘドモ | オキヒト | 人老 | オイヨ | オユドモ | ホムルコエ | 聲答 | ホムルコエ | ホムドモ |

されを、動詞に於て第一、第二、第三、第四轉の活用あり、其活用毎々、各詞尾を變化するものを、四段活用の動詞といふ、第一、第二、第四轉と第三轉の

| | | | | | |
|------|--------------------------------------|---------------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 三段活用 | 来 | 第一轉 | 第二轉 | 第三轉 | 第四轉 |
| 為 | 来 | キ | ス | スル | セ |
| セ | 来 ニ テ シ ル コ ト ニ | キ テ シ ル コ ト ニ | ス ル コ ト ニ | ス ル コ ト ニ | セ ル コ ト ニ |

一段及び三段活用の動詞の變書法を二段活用の動詞と異なることとし。

第二十六章 分詞

前章ヲ説示したる動詞の活用を猶詳ヲ理解セしめん爲メ茲ニ分詞を擧ゲ論ル。抑動詞の活用中、第三轉を現在ニ不定法トシ、其動詞の本然の形あり。其他第一、第二、第四轉ヲ於けるもの

を皆本然の形を變化せるものにして此變化の中、形容詞の用をあらはせる所あり。分詞といふ如何とありを、此詞を元來動詞の變書にして文主の作動を示せざるも、又形容詞の用を兼ぬるを以て、兩部分の詞ヲ涉る故ニ、分詞と名づくるあり。さて分詞に二種あり一を能動分詞とシ、一を受動分詞とシ、これ皆名詞の前ヲ可るを通常の形とす。

さて形容詞の用をあらはす於て、四段活用の動詞も、本然の形を變ぜることあり。假令を 打ッ

とつゝとまを、動詞の本然の形あるも、打ッ
 人 とつゝとまを分詞にして、形容詞の用を不
 以が如し。又二段、一段及び三段活用の動詞ヲ於
 て、必ず第三轉第二行の活用を以て、故ヲ本
 然の形に於てを、落ッ 流ル 見 為 とい
 へども、形容詞ヲ用をある分詞ヲ於てを、必を
 ルある詞尾を加へて、落ッル雪 流ル、水
 見ル人 為ル事 といふが如し。
 今能動分詞と、受動分詞の區別を知らざるを為
 ず、略表を左に掲ぐ。

| 四段活用 | 中二段活用 | 下二段活用 | 一段活用 | 三段活用 |
|---------|-------|-------|------|------|
| 能動 打ッ人 | 落ッル雪 | 流ル、水 | 見ル人 | 為ル事 |
| 分詞 開ク戸 | 用ケル人 | 捨ッル物 | 射ル矢 | 来ル人 |
| 受動 打タル人 | 落トサル雪 | 流サル、水 | 見ラル人 | 為ラル事 |
| 分詞 開カレ戸 | 用サラル人 | 捨テラル物 | 射ラル矢 | 来ラル人 |

猶第二十四章、動詞乃種類を參へ見らるべし。
 分詞の中より、全く形容詞の如く名詞の位を冒以
 ものの所あり、即 打チ 落チ 流レ 等の如し。又
 名詞と結合して、全く形容詞とあるものあり、即
 打手 落葉 鑄型 等の如し。

副詞の列とを「ム」ナラシム「ク」約言「シ」アラシム「以」言
全と異あり、
皆未來を「あり」。此類の詞も、猶數多の是れども、皆平
常普通のものなり。あつたを、茲に載せぬ。猶日本
大文典

又び日本文典外編、テ
ニ「ハ」の部を詳あり、
此等と他の動詞と結合して、其活用を示し、最
要用のものあり。今その法と時限の部を於て、
逐次を説示まべし。

第二十八章 動詞の法

大凡文を綴り、或を説話をあつた方とて、作動の
次第を定め、自他の區別を現ます定則あり、それ

を動詞の法とて、まて法を五個あり、即不定法

直説法、命令法、接續法、疑問法あり。

不定法を文主あり、唯時限を定まて、作動を一般

に示し、そのあり、即 行キタリ 行ク 行カン

等のごとし。

直説法を平常の説話にして、文主の作動を直了

説示まらむのあり、即 吾ガ行キタリ 吾ガ行

ク 吾カ行カン 等の如し。此格の法も、不定法配合し主

るもの

命令法を、使令をあつた用うる法にして、亦希求

勸止等を示し、此法ヲ屬レ。まて使令、希求等を
ふまんと欲する人を、必^レ眼前ヲ在^ルべきを以
て、時限も常に現在あり、即 汝ヨ行ケ 茲ニ在
レ 予ヲ助ケヨ 君ヨ行キ給ヘ ナ行キゾ
行クコトナカレ 等のこと。

茲^レ、ヨの字も、使令を示し感詞あり。 ナと否
不を示し副詞にして、ナカレとナクアレの約
言あり。

接續法も、文章の接續を示しものあり、常に接
續詞のドドモトトモトキバヲ結合し、即 今汝

行ケド 彼ハ行キタレドモ 今行クト 我ハ

行クトモ 彼ノ行クトキ 汝行カバ 等の如

し。

疑問法も、疑惑して、人ヲ尋ね問ふとき不用する
法にして、必^レ疑問副詞の「カヤツ」と結合し、
のあり、即 汝ハ既ニ行キタルカ 予ハ今行ク

ベキヤ 此ノ如キモノハ何ゾ ソレハ誰ナル

ゾ 等のごとし。

此五法も、作文説話の要領にして、我國一切の言
語皆此法ヲ漏るることなし。今猶其詳解を知ら

一めん為る助動詞及び時限と配合して、第二十九章ヲ説示せんし。

第二十八章 動詞の時限

動詞の時限も、過去、現在、未来の三時あり。又これを小別して、第一現在、第二現在（去り半過）、過去、第一未来、第二未来とせん。

過去も、既往の時ヲ方めて、おしたる作動を示し、
ものあり、即 彼ハ前日他國ニ行キタリ 予ハ
此事ヲ昨年告ゲラレタリ 等のゴヤシ。

第一現在も、現今作動する仕業を示はるものあり

即 予ハ今行ッ 彼ハ目今教ヘラル 等の如

第二現在、即半過去も、現今おしたる作動の漸く

終りたる瞬間を示し、或を既にありたる仕業を、

目今説話する時限を示はるものあり、即 彼ハ今

他國ニ行キン 今午時ノ鐘ヲ撞チヌ 或は

先刻マデ予ハ教ヘラレシ 等のゴヤシ。

此時限も、平常の説話ヲ多く巧みて、五要用の
ものありども、文章に於ては、特ニ過去と混ト
易し。唯文章中、現在を示はる副詞（今）と説話

る時限の現今あるより従て、其區別を定む。故
り第一現在と過去との兩時限の、一和しきる
ものや知るべし。

茲に擧げたるシと、元來キの轉にして、過去を
示は助動詞あるが如く、亦文意に従て、半過去と
もあるものなるを、今暫くかくし收む。

第一未來を、今より後を於て、作動せんとする仕
業を示はものあり、即 明日此地へ來ルナラン

予ハ後日他國へ行カン 出デ行カン人ヲ止

メム 等のこと

第二未來と將來の時限より於て、期まへき事を示
し或を既に為したる歟を考察して、説示せんとす
用いふものあり、即 彼ハ明朝來ルデアラン

明日ハ此書ヲ讀ミ終ルコトモアルナラン 或

行ク駒モ不破ノ関ヲバ越エツラン 明日

ハ今時既ニ學校ニ到リテアラン 彼ハ最早彼

地ニ到着シタルナラン 等の如し。茲に越エツ

テアラシの

猶此時限を審り示さん為る、次章より於て、動詞と
助動詞と配合の例を擧ぐ、宜く就て參考せしむ。

第二十九章 配合の例

以上予論説したるものを、猶分明に理解せしめんが爲す、茲に配合の例を掲ぐ。抑此配合も、動詞の法、及び時限を示し、大有用のものなり、及び覆玩味し、其次第を審に理解せよ。

| | | | | |
|---|------------------------|--------|--------|--------|
| 直 | 法定不 | | | 第一現在 |
| | 予ガアル | ス 為 | ウ 得 | アル有 |
| | 予ガアリシ | セシ | エシ | アリシ |
| | 予ガアタリ | シタリ | エタリ | アタリ |
| | 予ガアラシ | セシ | エシ | アラシ |
| | 第二現在 <small>半過</small> | | | 過去 |
| | 第一未来 | | | 第二未来 |
| | 予ガアル | ス 為 | ウ 得 | アル有 |
| | 予ガアリシ | セシ | エシ | アリシ |
| | 予ガアタリ | シタリ | エタリ | アタリ |
| | 予ガアラシ | セシ | エシ | アラシ |
| | 予ガアルデアラシ | スルデアラン | ウルデアラン | アルデアラン |

| | | | | | | | | |
|--------------------|--------------------|---------------|-----------------------|---------------------|-----------|-----------|------------|------------|
| 問疑 | 法續接 | | | 法令命 | | | 法説 | |
| | ウルカ ウルヤ | アルカ アリヤ | スルトモ スレバ スルナレバ | エバ アルナレバ アルトモ | 汝ヨアレ レ | 汝ヨエヨ レ | 汝ヨセヨ スレ | 予カウ 予ガス |
| エレカ エレヤ | アリカ アリヤ | セシトモ スレドモ | アリシレバ アルトモ アルトモ | | | | 予ガエシ | |
| エカ エヤ | アリカ アリヤ | シタレバ シタレドモ | アリシレバ アルトモ アルトモ | | | | 予ガエタリ | |
| エシカ エシヤ | アリカ アリヤ | セントモ センナレバ | アリシレバ アルトモ アルトモ | | | | 予ガエシ | |
| ウルデアランカ ウルデアランヤ | アルデアランカ アルデアランヤ | スルデアラントモ | アルデアラントモ | | | | 予ガウルデアラン | |

法

スルカ スルヤ

セシカ セシヤ

シタカ シタヤ

セシカ セシヤ

スルデアランカ
スルデアランヤ

今猶助動詞と結合して、法及び時限を精密に説
示せん為、四段活用、中二段及び下二段活用の
動詞を擧げて其變畫を左に載れ。

不定法并に直説法

| | | | | | | | | | |
|------|------|-----|------|------|---|-------|-------|-------|------|
| 現在 | 第二 | 現在 | 第一 | 四段活用 | 打 | 中二段活用 | 閉 | 下二段活用 | 受 |
| 動受 | 動能 | 動受 | 動能 | | | | | | |
| ウタレシ | ウタレヌ | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | | ウク | |
| | | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | トツルナリ | ウケル | ウケナリ |
| | | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | トツルナリ | ウケル | ウケナリ |
| | | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | トツルナリ | ウケル | ウケナリ |
| | | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | トツルナリ | ウケル | ウケナリ |
| | | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | トツルナリ | ウケル | ウケナリ |
| | | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | トツルナリ | ウケル | ウケナリ |
| | | ウタレ | ウツナリ | | | トツル | トツルナリ | ウケル | ウケナリ |

命令法

| | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|-----|------|-----|------|-----|------|---|-------|-----|-------|-----|
| 現在 | 第一 | 未来 | 第二 | 未来 | 第一 | 過去 | 四段活用 | 打 | 中二段活用 | 閉 | 下二段活用 | 受 |
| 動受 | 動能 | 動受 | 動能 | 動受 | 動能 | 動受 | | | | | | |
| ウタレヨ | ウテヨ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |
| | | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |
| | | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |
| | | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |
| | | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |
| | | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |
| | | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |
| | | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | ウツナリ | ウタレ | | | トツレヨ | トツレ | ウケレヨ | ウケレ |

日本文典卷三

九

ること左の如し

人^レも^レ身^ヲ幸^フ福^ヲあ^ハん^{コト}を願^フと^ス

接續法

第一未来

能^ク其^レ身^ヲ脩^ムめよ^{天^ヲ善^{人^ニ福^ヲ與^フる^{物^ノあり}}}

命令法

第一現在

第一現在

汝^ニ書^{物^ヲ}得^{タリ}や^{書^{物^ヲ}}け^キと^ス

疑問法

過去

接續法

第一現在

事^ヲ學^ブふ^{コト}能^ハざ^{らん}

直説法

第一未来

第三十章 動詞の定音

我國の動詞より一定せる音ありて、其^ハク^スッ

又^ハフ^ムユ^ルウ^ニ終^ルもの^を、現在^ノ不定^法と云ふ^ルは動詞^ノ本然^ノ形^{あり}。但^レ一段^{活用}ノ動詞^ノの^ハ此^法に由^らず[、]故^にこれ^を不規則^{動詞}と云ふ^{あり}。而^レ又^其變^畫に於^ける^も、必^ず其^行ふ^變じ^ること^を示^し。假令^がク^ニ終^ル動詞^を、皆^カキ^クケ^コの外^に轉^スること^{あり}。又^ハ終^ル動詞^は皆^カシ^レス^セソ^ノの外^に轉^スること^無き^が如^し。今^略表^を左^に掲^げ、其^定則^を示^{さん}。

| | | | | | |
|------|-------|-------|------------------|----------------|---|
| ア行 | ○ | ○ | 得 ^タ マ | 射 ^イ | ○ |
| 四段活用 | 中二段活用 | 下二段活用 | 一段活用 | 三段活用 | |

| | | | | | | | | | | |
|----|---|-----------|---|---------|---|-------|---|---|---|-------|
| カ行 | 飽 | アカ、ア、ア、ア | 起 | オキ、オク | 受 | ウク、ウケ | 着 | キ | 来 | キ、ク、コ |
| サ行 | 押 | オホ、オシ、オホセ | | ○ | 瘦 | ヤス、ヤセ | | | 為 | シ、ス、セ |
| タ行 | 打 | ウタ、ウチ、ウツ | 落 | オチ、オク | 捨 | スツ、ステ | | | | |
| ナ行 | 往 | イ、イ、イ、イ | | ○ | 兼 | カヌ、カネ | 似 | ニ | | |
| ハ行 | 逢 | ア、ア、ア、ア | 意 | ヨ、ヨ | 交 | マシ、マシ | 千 | ヒ | | |
| マ行 | 住 | ス、ス、ス、ス | 恨 | ウラミ、ウラム | 譽 | ホム、ホメ | 見 | ミ | | |
| ヤ行 | | ○ | 老 | オイ、オユ | 消 | キユ、キユ | | | | |
| ラ行 | 有 | ア、ア、アル、アル | 降 | フリ、フル | 枯 | カル、カレ | | | | |
| ワ行 | | ○ | 用 | モチ、モチ | 飢 | ウ、ウ | 居 | キ | | |

表中の空所は此行の音に終る動詞なきもの

あり。

第三十一章 集合動詞

集合動詞の數種あり。

第一 二個の動詞の互に結合して、恰も一語の如くあるものあり。即ちカヘリミル、返見、ハイル

入這、カカノボル、逆上、モテナス、待成、タバシル、走飛

ニタツ、騰沸、ニコム、和、等の如し。

第二 二個の動詞相連結して軌語とあり、一の意義をあらわすものあり。即ちキコシメス、召問、クダサル

下被、ワケトル、取受、ワケアフ、合請、タチモトル、御非、ノダリ

相本、取受、合請、御非

下被、取受、合請、御非

アフ 〔達旋〕 等の如し。

又他の詞と合併するもの三種あり。

第一 名詞と結合して、恰も一語の如くあらざるものあり。即

見目 ウナヅク 〔点頭〕 カイマハ 〔垣間〕 ヒダツ 〔立口〕 タムク 〔向手〕 コ、ロミル 〔心見〕 ウシロム 〔後見〕 スミユ

ムシバム 〔食蟲〕 テラフ 〔手拂〕 タナビク 〔摩子〕 コ、ロウ 〔得心〕

トリス 〔鑽〕 等の如し。

第二 副詞或は形容詞と結合して、恰も一語の如くあらざるものあり。即

ヒトリゴツ 〔語獨〕 オハス 〔座御〕

ワカユ 〔生苦〕 等の如し。

第三 タチウチトリサシヒキアヒの如き、意義のふき語を前に置きて、動詞の意味を強くあらざるものあり。即

タチワカル 〔別立〕 ウチマカス 〔街打〕 トリミ

ガス 〔取〕 サシユルス 〔許差〕 ヒキワタス 〔測〕 アヒタノム

等の如し。

此タチウチ等の詞も、元來動詞の變畫にして、

各本然の意義を失ひ、此の如く動詞と結合

せざるを、自己の意義を失ひ、唯動詞の意

味を強くあらざるものあり。

第三十二章 他の詞より轉じ来る動詞

他の詞より轉じ來りて、動詞とありたる詞に四種あり。

第一 名詞より轉じ來りて、直に動詞とありたるものあり。即 ヨドム 淀 モミツ 糲 ヤドル 宿 キラス

霽 等の如し。

第二 元來の形容詞の終り、ムの字を加へて、動詞とありたるものあり。即 赤ム 高ム 廣ム 等の如し。

第三 漢字音の後にス 為 の字を加へて、動詞とありたるものあり。即 論ズ 奏ス 怨ズ 御覽ズ

興ズ 等の如し

第四 漢字音を以て、直に動詞とありたるものあり。即 シフネシ 念執 サウゾク 糠 クユ 薫 レウル 理料 コジ ク 飢 等の如し。

此四種の詞を、既に動詞とありたるものも多し。其活用の格も、亦元來の動詞と異なることあり。

第三十三章 副詞

副詞も、動詞或は形容詞の現したる、形状情態を猶精く示はるものにして、常に動詞及び形容詞に副ひたる詞あり。即 彼ハ 夙ニ 起キ 夜半ニ 寢ス

生徒ハ能ク書物ヲ讀ム 彼ハ實ニ善キ友ヲ
得タリ 東京ハ甚ダ大ナル都會ナリ 等の如
し。

此等の文章に於て、夙ニ夜半ニ起キ寢キある
動詞の作動を審定し、實ニ甚ダク善キ大ナル、
といへり、形容詞の意味を詳示し、ものあり、
又他の副詞の傍にありて、其意味を審定し、こ
とあり。即 教師ハ甚ダ親切ニ生徒ヲ教フ 師
範學校ハ尤早ク教則ヲ定メタリ 等の如し。
茲に甚ダ尤も副詞あり、親切ニ早クある他

の副詞の意味を審定し、ものあり。

第三十四章 副詞の品類

大凡副詞々、其意義の差等に従て、多種ヲ分別し、
今其格別あるものを、左ヲ列載し。

第一位地副詞

茲ニ 彼處ニ 其處ニ 右ニ
左ニ 前ニ 遙ニ 各處ニ 等の如し。

第二時刻副詞

曩ニ 以前 今 後 初メニ
終リニ 昨日 明日 來年 何時ニ

此時 時ニ 曾テ 久ク 暫ク 等の如し。

第三及覆副詞

毎度 度々 再ビ 屢 不断

時々 何時モ 等の如し。

第四順序副詞 第一ニ 二番ニ 最終 最後

向後 等の如し。

第五分量副詞 多ク 少ク 僅ニ 半 全ク

十分 多量ニ 等の如し。

第六状態副詞 善ク 悪ク 美シク 見事ニ

強ク 弱ク 堅ク 等の如し。

第七決定副詞 造ニ 必ズ 然リ 宜ク 等の

如し。

第八否不副詞 ナ 勿 無ク 否 未 ズ 又 不

等の如し

茲にナク、動詞の前ヲ有ること有リ。假令ど

ナコソ 勅 ナヤキゾ 燒 等の如し。又動詞の後

ヲ有ること有リ。假令ど カタルナ 語 カヘル

ナ 陽 勅 ヲクナ 行 等の如し。然れども、皆禁止を

示し副詞にして、其意味の異なることあり。

第九種今副詞 唯 別シテ 限リテ バカリ

ハ バ ノミ 等の如し。

茲ヲハ及びバハノミバカリおどく、同意ある

詞あり。假令ど 都ハ野邊ノ若菜ツミケリ

子於ては都バカリ野邊ノ若菜ヲツムとワ
以同トく。人ニハツゲヨとワ人ノ
ミツケヨヲ同トく。但本年ハ此例ニアラズ
あど子於ては本年一限リテ此例ニアラズと
ワ子同ト。又秋萩ノ花ヲバ兩ニヌラロド
モ君ヲバマシテヲシトコソ思ヘあど子於
ては花ヲバカリ君ヲノミとワ子同ト、決
てテニヲハのハと混ト可らぬ。

第十 併合副詞 共ニ 兼テ 并ニ 一同ニ
等ノ如シ

第十一 推量副詞 疑ラクハ 恐ラクハ 蓋シ
等ノ如シ

第十二 疑問副詞 如何様ニ 何故ニ 乎 歟
等ノ如シ

茲に乎及びひ歟を、元來感詞多しども、文意と用
法ヲ從て、疑問ヲ示シ副詞とあるものあり。假
令々 時鳥鳴クヤ 五月ノ 浪速津ニ咲クヤ
此花 啼ケル鳥 花ヤ蝶ヤ 又 玉ニモヌ
ケル春ノ柳カ 散ル花ゴトニタダフ心カ
あど子於ては、感詞にして、更に疑問の意味ナ

しと云ども、亦用法ヲ從テ副詞とあること、左の例に載はるる如し。假令を ワが思フ人ハ アリヤナシヤト 紅葉ノハレハ散ルヤ散ラズヤ 又 寝テ加寤テ加 あどの如し。此等と皆感詞より轉じ來て、副詞とあるものふ

第十三 發語副詞

抑 夫 偕 等の如し。

此等の詞々、稀ク文意を強クあるに、巧き言も、多くを以テ調の好き為に、文章の初に置くものにして、意果なき詞あり。

第三十五章

副詞々、本来のもの、他の詞より轉じ來るもの、何、假令をナ^カ、必、即、悉等の如き、本来の副詞と見ゆ。其他速ニ濃ニあどの如きも、他詞より來るものと、分明ありざるを以て、亦本来のものとなす。但此等の詞尾あるニをナルナノヲ變はると、さ、な、ら、りのあり。然れども此類をニアルニナルの約言にして、實を副詞、動詞と結合し、分詞とありて、形容詞の用をあたはるものあり。故に今速ナル馬、濃ナル色と^り、速

基形詞條見

ニアル馬、濃ニアル色と、リの約言にして、其速ニ濃ニと副詞、アルと動詞ある、如し。

さて分明に、他詞より轉じ来るもの、數種あり。

第一キヲ終る形容詞の詞尾を、クに變じて、副詞と爲るものあり。即 高ク 早ク 善ク 固ク

樂シク 尊ムベク 紛ラシク 等を皆高キ

早キ、善キ、固キ、樂シキ、尊ムベキ、紛ラシキ、等ある。

形容詞より来るが如し。

又此類の詞の詞尾を、シヲ變じて、クと爲る、活用の意を示は故に、往古と總てクシキ活用の詞

と不して、用言詞の中に收めたり然きども、本然の性質に従て、今こゝを三種に區別す。

第二 形容詞の終る、ニの字を加つて、副詞と爲るものあり。即 第一ニ 第二ニ 第三ニ 等の如し。

第三 本来の名詞より来るものあり。即 時ニ 日々 無益ニ 達者ニ 年ニ 等の如し。

第四 動詞より来るものあり。即 思フニ 假リニ 決シテ 急キテ 至リテ 増シテ 剩サヘ 恐ラクハ 等の如し。

其他數多の詞を集合して副詞とあるものあり。
假令ぞ 此時ニ當リテ 然ル故ニ 止ムコト
ニ得ズシテ 思ハズシテ 心ナラズモ 右ハ
通り 仰ノ如ク 等ノ如シ。

第三十六章 接續詞

我邦の接續詞に二種の大區別あり。○第一種を
兩名詞間の關係を示し、或は名詞と動詞との關
係を示すものにして、多くを名詞の位地、或は作
動の時限を審定するものあり。さて此詞を常に
名詞の後下たるを以て、又後詞と名たることあり。

了。

此類の接續詞を西洋語に於く前詞といひ、こ
を彼國の文章に於ては常に名詞の前にある
を以てあり。又先哲は、これを指示言と云へり
位地、時限等を指示する故あり。近世の支那書
同治八年刻、美國人高斯亞、支那人魏儒珍、
合著にて、文學書官語と名けたる書あり。に
示處言と云へり。但我邦に於ては、全く接續の
用を有る故に、今これを接續詞の中に收む。

○第二種の接續詞は、事物或は文意を連續し、殊
に詞を續き章句を合せ、全文を有るものあり。

第三十七章 第一種の接續詞

此詞々名詞或も代名詞の後に於りて、互の關係を現はしむるに於て、位地、時限を指示しむるものあり。假令が 友アリ遠方ヨリ来ル に於ては、友ノ来ル位地を示し。上野ヨリ下総マデ總テ平地ナリ に於ては、平地ノ有ル位地を示し。心中ニ惡念ヲ生スルコト勿レ に於ては、惡念ノ生スル位地を示し。又 我等ノ周囲ニ空氣ハ充滿ス に於ては、空氣ノ充滿スル位地を示す。如く。年ノ内ニ春ハ来ニケリ に於ては、春

ノ来ル時刻を示し。晝ノ間ハ日光ヲ見ルに於ては、日光ヲ見ル時限を示し。如し。○此等のうち、中ニ周囲ニ内ニ間ハある詞々ノハある格ヲハニを知らず、恰も名詞の如くあるものも、實に接續詞にして、心と惡念、我等と空氣、年と春、晝と日光との互の關係をあらはしあり。此接續詞の格別あるものも、ヨリ從自マテ迄中、外、上、下、前後、周囲、内、裏等あり。第三十八章 第二種の接續詞 此種の接續詞も、詞を連ね句を合せ、或も章を續

き、文意を連続するものあり。今各一二の例を掲げ、其詳ありを示さんし。

第一 二三の詞を連ねるものあり。假令を 惟我

ト爾トコレ有ルカ 夏ト秋ト行カフ空ノ通ヒ

チハカタヘ涼シキ風ヤ吹クラム 等の如し。

第二 兩三句を連合するものあり。假令を 空氣

ハ凡酸氣三分ト窒氣七分トニ成ル 流レ本ト

立ツ白浪ト燒ク塩ト孰カ辛キ渡ツミノ産 尾

花ガ風ニ庭ノ月影 ぶどうの如し。

茲よりある詞をトと其意味の異なることある

し。

第三 二三の文章を、連続するものあり。假令が

柳葉ハ緑ニシテ桃花ハ紅ナリ 深山ニハ松ノ

雪ダニ消エナクニ都ハ野邊ノ若菜ツミケリ

少ト樂シ樂ムト衆ト樂シ樂ムト孰カ樂シキ

等の如し。

第四 前章の意味を、接續するものあり。假令を

此故ニ君子ハ其獨ヲ慎ム 是ニ由テ之ヲ觀レ

ハ人々學ブトキハ賢トナリ學バザルトキハ愚

トナル 等の如し。

第三十九章 接續詞の品類

接續詞を其用法の差等に從て又るを多種に

區別し之を接續詞の品類とす。

第一 合連接續詞

ト 與 及ビ 而シテ 并ニ
且ツ 加之 ヲ、 ナガラ 行類。ナ 等

の如し。

第二 決定接續詞

此故ニ 然ル故ニ 然シハ
是ニ由テ 等の如し。

第三 原目接續詞

從テ 為ニ 二 爲ニ 同意
假令ニ 爲ニ 來テ 人の類 同シ。 等の如し。

第四 位地接續詞

ニ 於テ 二 於テ 同意
ハ 舞フ 類 如シ。 就テ 等の如し。

第五 區分接續詞

又 或ハ 將々 秦欲漢欲
抑 必其政ヲ 閱ク 之ヲ 興フルカ 抑 意ヲ 求ムル 類

發語副詞の 等の如し。

第六 反對接續詞

然レドモ 繼令 雖モ
トモ ドモ 在茲に 時限に 屬シ 清トモ 濁トモ 現

結合 過去の時 限ハ 屬ス 假令モ 現在の動詞
去の動詞 結合ス 第二十九 章 配合 例を合セ 凡
トモ 山ニ 松ハ 雪ハ 赤ダ 消ハ 消エ 消レ 消ト 類

ふふ意 ナガラ 軽少ナカ 類 モ と り て 軽 等の如し。

第七 設有接續詞 ナラバ モシ アラバ トキ

ハ則 否ラザレバ 等の如し。

第八 取捨接續詞 ヨリハ 寧 口 就中 ヨリ

外 風 ヨリ 外 ニ 問 ノ ヨリ 後 咲 初 シ 時 ヨリ 類 有 ル 等の如し。

第九 説明接續詞 譬 ハ バ 如何者 即 等の如し。

第四十章 感詞

感詞を、事物作動に係ること無く、唯喜怒哀樂驚嘆等の情に感して、發する詞をいふ。これ必竟心に感動はることありて、覺えん發する聲にて、詞の意義よく、唯喜怒哀樂等の模様を強く示はるものあり。

此詞を多く發語の如くありて、詞の首に来り、章句の意味を強く示はるものあり。或は詞の尾に在りて、文意を構成はるものあり。假令が 噫々 天 我 亡 ボ セ リ の 噫 と 我 と 我 ヲ 助 ケ ヨ あ ら ん ヨ の 如 し。然れども又詞の首尾に来ることあり。

を論ずる、唯口調の好く、ん為に呼ぶもの多し。

第四十一章 感詞の品類
感詞も、亦喜、怒、哀、樂等に從て、各其呼聲を異にし、
これを感じの品類とり、即左の如し。

第一 歡喜の感詞即 アナ アレ アシナ アシナ類 アリウ

第二 悲哀の感詞即 アナ シア類 哀 アイ 意

第三 驚嘆或る感慨の感詞即 コハ フヤ マ

第四 忿怒の感詞即 ヤオレ シツ 咄

第五 鎮止の感詞即 シツ 咄 シ、

第六 勸勵の感詞即 サ、

第七 賞讚の感詞即 ヨシタタ 美

第八 希望の感詞即 ドウゾ ドウガナ モガ

第九 招呼の感詞即 ヤ ヨ ナウ 喃

第十 發笑及び哭泣の感詞即 ハ、 カ、 トカ 笑

類。 ヲ、 クヨ、ト泣

又兇人アリ 賊アリ来り救へ 有り難シ 痛

哉 氣ノ毒 過テリ 不可 近年支傳那語 等

如き、痛惻或々感慨を示し詞も亦感詞のうきも
收打。

其他各物の響音を摸江る詞も亦感詞といふ。假令

を ドンブリ 井の水の中物 ガラ瓦落つ、墜つ

音。ハク 飄風の音吹 サツ 瓦風の音 等の

如し。

第四十二章 習煉

前章に於て既し七品詞の用法及び性質を説明
せり今猶くきを審み示さん為ふ一二の文例を
左に掲げたり。

直説法第一現在

父母名詞第三格に仕動詞て、孝順ふるも天地自然の道名詞第一格に接續詞ふ

人々名詞第一格須臾も此道名詞第一格を離る動詞を、
然る接續詞に

直説法第一現在

外物の為名詞第三格に接續詞こころを奪動詞はれ、
其道名詞第一格を失動詞ふとあり

接續法第一未來

天地自然の道名詞第一格に由動詞らんと欲動詞せむ務接續詞め

命令法

邪惡の念名詞第二格を去動詞り善行徳義を體認動詞すべし

